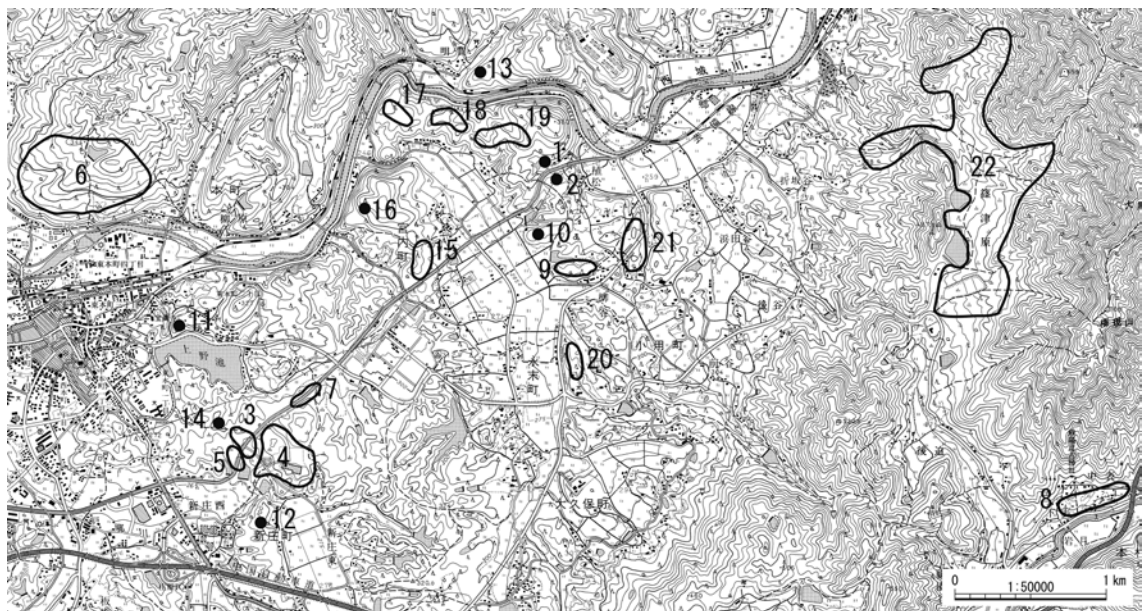


佐田谷・佐田峠墳墓群（第6次）の調査

野 島 永・辻 村 哲 農（庄原市教育委員会）・
藤 井 雅 大・村 田 晋

1. 位置と環境

佐田谷・佐田峠墳墓群は広島県庄原市宮内町佐田峠ほかに所在する。庄原市市街地中心から北東へ4km、西城町へと走る国道183号線沿いの低丘陵上にある（第1図）。両墳墓群は隣接した丘陵尾根上に位置しており、弥生時代中期後葉から後期前葉頃に営まれた。佐田谷墳墓群は3基、佐田峠墳墓群は5基の墳墓によって構成されている。なかでも、佐田谷1号墓は後期初頭の四隅突出型墳丘墓で、木棺を覆う木槨を埋葬施設としてもつことが明らかとなっており（妹尾編 1987）、当該地域の墳丘墓の発展を物語るものとして以前から注目されていた。両墳墓群から南西2.5kmには、弥生時代中期から後期にかけて営まれた和田原遺跡群（藤田 1988、松井編 1999、稲垣編 2001、稲垣・今西編 2004ほか）がある⁽¹⁾。弥生時代中期中葉から後期にかけての住居跡群が調査されており、両墳墓群の造営時期に一部併行して営まれた集落跡であることがわかった。当該地域における拠点的な集落であったものとみられており、鉄器や鉄素材も多数出土した。（野島 永・辻村哲農）



第1図 佐田谷・佐田峠墳墓群周辺主要遺跡分布図（1/50,000）

1. 佐田峠墳墓群 2. 佐田谷墳墓群 3. 小和田遺跡 4. 和田原遺跡群 5. 西山遺跡 6. 御神田山遺跡群
7. 永宗遺跡 8. 欽寄遺跡 9. 広政古墳群 10. 矢崎古墳 11. 瓢山古墳 12. 地王神社古墳 13. 唐櫃古墳
14. 牛塚古墳 15. 陰地古墳群 16. 殿島山古墳 17. 大歳古墳群 18. 山根古墳群 19. 寄藤山古墳群
20. 永末古墳群 21. 柳谷古墳群 22. 篠津原遺跡群

2. 調査の経過

佐田谷墳墓群は昭和61（1986）年、一般国道183号線のバイパス道路建設にともなって発見された。文化庁および広島県教育委員会の指導、広島県庄原土木事務所や広島県立歴史民俗資料館、庄原市教育委員会などの関係機関の協力、さらには地元住民による保存要望によって、現地保存が実現した。

その後、周辺はさらなるバイパス道路整備計画（江府三次道路建設）の路線地内に含まれたことから、平成9（1997）年には、庄原市教育委員会によって試掘調査が行われ、佐田峠墳墓群が確認された。その際にA・B・C地区が設定され、A地区では方形台状墓（1・2号墓）、C地区では四隅突出型墳丘墓（3号墓）、方形貼石墓（4号墓）、方形周溝墓の一部と考えられる周溝（推定5号墓）などが確認された。このため、庄原市教育委員会と広島県庄原土木事務所の協議によって、佐田峠1・2号墓周辺と3号墓、およびその周囲の遺構確認部分の現状保存が決定した。

庄原市教育委員会では、現状保存となった佐田谷・佐田峠墳墓群の史跡指定の可能性を模索するために、広島大学考古学研究室に学術調査の依頼を行うこととなり、平成20（2008）年、両者による共同研究が開始された。これまでの調査では、庄原市教育委員会の試掘調査時の平板測量記録に基づき、試掘埋め戻し土を除去し、一部掘削や断ち割りなどを行いつつ、詳細な記録の作成を継続してきた（野島・石貫・小林ほか 2009、野島・矢部 2010、野島・脇山・齋藤ほか 2011、脇山・今福・小森ほか 2012）。2～4次調査では、C地区の3・4・5号墓、5次調査では、A地区1・2号墓の発掘調査を行い、試掘調査区の再確認と遺構の詳細な記録を作成した⁽²⁾。その結果、1・2号墓は外表施設をもたない方形台状墓であったこと、3号墓は貼石のみをもつ四隅突出型墳丘墓となること、4号墓は貼石と列石をもつ四隅突出型墳丘墓であったが、その後墳丘の改変が行われたこと、5号墓は埋葬施設の確認により方形周溝墓であることが判明した。

また、これまでの発掘調査のなかでも最も重要な調査成果のひとつに、墳丘構築方法の変化が想定できたことが挙げられる。弥生時代中期末葉から後期初頭に属する佐田峠3号墓の調査では、墓壇を掘削した後に墳丘となる盛土（封土）を行い、その上からさらなる墓壇を掘削しつつ、墳丘を徐々に形成し、最後に貼石を施すという墳丘構築方法を明らかにした（野島・石貫・小林ほか 2009）。中期末葉となる佐田峠4号墓も埋葬後に墳丘が構築された可能性が高いものであった（野島・矢部 2010）。一方で、後期初頭の佐田谷1号墓の墓壇4基はいずれも墳頂平坦面現地表下付近において確認されていた（妹尾編 1987）⁽³⁾。つまり、両墳墓群内において、墓壇掘削および埋葬の段階が墳丘構築中か、構築後かという差異があることが判明したわけである。しかし、それが墳墓群の間の格差なのか、墳丘墓の時期的な変化なのかが確定できずにいた。このため、今回の調査では、墓壇の状況が確認できていなかった佐田谷2・3号墓および、佐田峠1・2号墓の墳丘構築と墓壇掘削・埋葬がどのような関係にあるのかを主眼とした調査を行うこととなった⁽⁴⁾。

昨年度、佐田峠1・2号墓の調査を行った広島大学考古学研究室が継続して佐田峠1・2

号墓の埋葬施設の確認調査を行い、庄原市教育委員会が佐田谷 2・3 号墓の埋葬施設の確認調査を行うこととした。なお、現地調査は、最小限の掘削と遺構検出にとどめることとした⁽⁵⁾。表土掘削後の遺構検出によって埋葬施設が検出できなかった場合は、墳丘構築前段階あるいはその途中で墓壇掘削・埋葬が行われている可能性が高いものと判断することとした。なお、佐田谷 3 号墓については現状において墳丘南側部分が大きく削平されていたため、この墳丘削平面の精査によって、埋葬施設の確認を行うことに努めた。

佐田谷 2・3 号墓 昭和61年の発掘調査では、佐田谷 3 号墓は方形台状墓と認識された(妹尾編 1987)。先述のように、すでに林道と土取りによって南側が大きく破壊されていた。墳丘長幅比からすると、墳丘の1/4程度にまで破壊が及んでいたことから、すでに埋葬施設の一部が露出しているものとみられたため、墳丘南側の削平面において埋葬施設が検出できる可能性が高いと考えられた。また、3 号墓の墳丘盛土中から掘り込まれた墓壇の一端と考えられる「落ち込み」(妹尾編 1987)が確認されていたことから、埋葬施設はおそらく墳丘中において検出される可能性が高いと想定した。埋葬施設が墳丘中において検出された場合、大規模な盛土によって墳丘を完成させる前に墓壇が掘削・埋葬される墳丘後行型、あるいは同時進行型(和田 2003、今福 2012)と推定することができる。そうであるならば、佐田谷 3 号墓は出土土器から中期後葉に造営され始めた可能性もあるので、墓壇掘削・埋葬後に盛土を行う墳丘後行型や同時進行型の墳丘墓が両墳墓群の弥生時代中期段階に造営されていたと推測できる。しかし、佐田谷 1 号墓と同様に墳丘先行型であったとすると、墳墓群ごとに異なる墳丘構築状況を想定せざるをえないことから、3 号墓の墳丘南側削平面の精査は、両墳墓群全体の様相を明らかにする共同研究の目的のためには欠かせない工程とみなしていた。

現地では、3 号墓南側の墳丘削平面に第 1 調査区を設定した。また、昭和61年度の調査において確認されていた墳丘下層の「落ち込み」を再度検出するため、当時の調査トレンチと重複するように第 2 調査区を設定した。さらに、2 号墓の墳頂平坦面に第 3 調査区を設定し、埋葬施設の平面検出を試みた。

佐田峠 1・2 号墓 昨年度の調査によって、隣接して築造された佐田峠 1・2 号墓の規模をおおよそ推測することができた。両墳墓ともに墳丘隅角が突出する形態ではなかったことから、四隅突出型墳丘墓とはいえない。斜面地に築造されていたため、その墳丘高は一定ではないものの、1 号墓は南北17m、東西13mあまり、高さ1.4～1.7mの方形台状墓、2 号墓も南北14m、東西15mあまり、高さ0.6～2.0mの方形台状墓であることが推定できた。墳丘自体の長幅比からすると、佐田谷 1 号墓に近い形態であることから、佐田峠 1・2 号墓は後期前葉の特徴をもつものと考えられる。庄原市教育委員会の試掘調査時に出土した土器片も後期前葉の範疇に入ることから、両墳墓の規模と時期についてはほぼ確定したといつてよい。墳丘構築方法と埋葬施設の関係については断ち割りなど、墳丘を大きく破壊することになる場合もあるため、その確認を控えていたが、墳頂平坦面の平面精査によって墳丘先行型か同時進行型かを判断する方針を庄原市教育委員会とともに確認したことから、佐田峠 1・2 号墓も佐田谷 2・3 号墓と同様に墳頂平坦面における埋葬施設の検出を試みることにした。

なお、今年度も昨年度同様に猛暑を避け、8月下旬から9月中旬に発掘調査を行った⁽⁶⁾。

(野島・辻村)

3. 佐田谷2・3号墓の発掘調査（第2図）

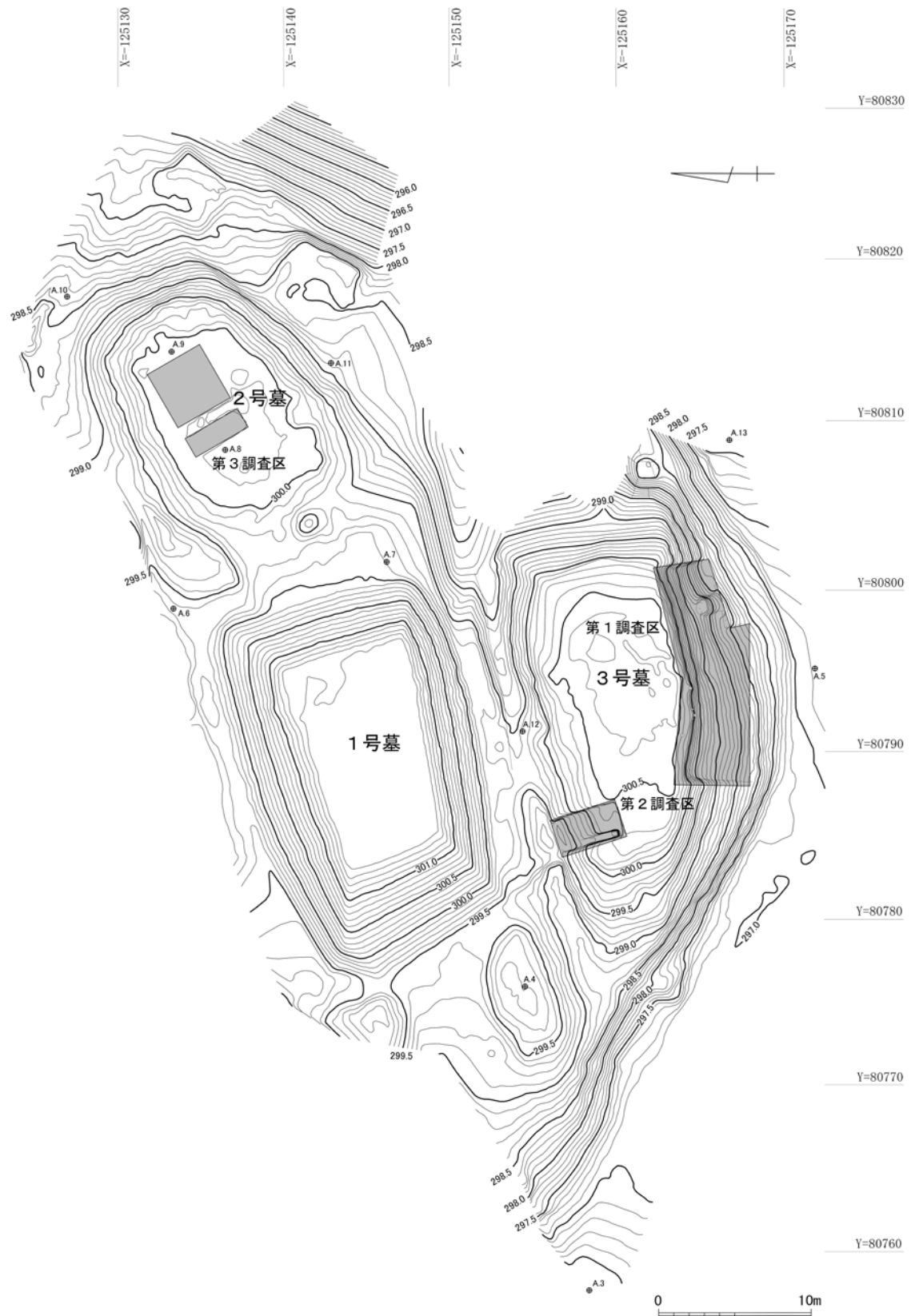
(1) 第1調査区（第3図、カラー図版第2a、図版第7）

佐田谷3号墓は、佐田谷1号墓の南側に位置している。墳丘は現状で南北11m、東西24m、高さは佐田谷1号墓との間にある周溝底から1.8mである。墳丘南側が林道と土取りにより大きく削平されており、この削平面に埋葬施設が露出していることが想定された。このため表土を除去すれば、埋葬施設と墳丘の構築状況を斜断面で確認することができ、なおかつ墳丘の破壊を最小限に抑えることができると考えた。そこで削平面に長さ13.4m、幅（傾斜面の斜辺長）2.6mの第1調査区を設定し、埋葬施設の検出を試みた。表土を除去したところ、埋葬施設とみられる掘形を5基分検出した。いずれも斜断面による確認であるため、この掘形の詳細な平面形や規模は不明である。

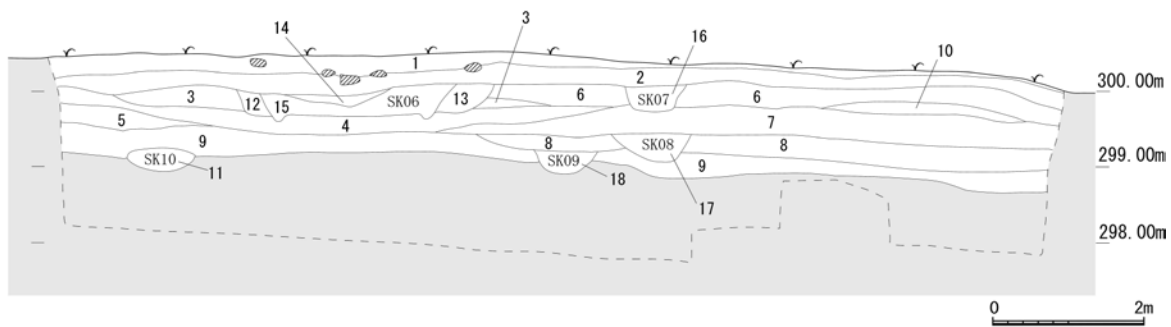
佐田谷1号墓と同様に地山を削り出して、盛土を行っていた。盛土は8層に分層することができた。表土（第1層）下にクサリ礫（ナメラ礫）を若干含んだ黄褐色土（第2層）があり、両土層の境界には径20cm前後の円礫が確認された。後述の墓壙SK06⁽⁷⁾の直上に集中することから、佐田谷1号墓の埋葬施設において確認された円礫と同様に、埋葬施設を標示するために配置したものと考えられる。また、第2層は調査区全体にわたって堆積していることから、埋葬を終えてから墳丘全体を覆った盛土であると考えられる。第2層の下には第3・6層があり、墓壙SK06・07はこれらの上面から掘り込まれている。若干の凹凸はあるものの、上面がほぼ水平となるため、これらはSK06・07を掘り込む前に墳丘を整えた土層とみられる。第4層の下には第5・7・8・9層があり、第8層上面で墓壙SK08、第9層上面で墓壙SK09、さらに第9層と地山の境界付近で墓壙SK10がそれぞれ掘り込まれていた。ただし、SK10を検出した付近は削平面の傾斜が緩やかになっており、本来は第9層上面もしくはさらに上層から掘り込まれていた可能性がある。

墓壙 SK06（図版第7a 中央） 墓壙SK06は第1調査区の西端から約2.5m東で確認された。第3・6層上面から掘り込まれており、墓壙底は第4層に達している。長さ3.4m、深さ0.4mで、墳丘長軸に平行ないしは斜行して造られていると考えられる。棺内埋土は2層にわかれる。第14層は木棺蓋の腐朽によって落ち込んだ土とみられる。第15層は棺内に流入した土とみられ、底部に2ヵ所凹みが確認できた。これは小口板を設置するために掘り込まれたものとみられるが、小口板の痕跡を確認することはできなかった。また、第15層は断面が逆台形を呈しているが、これは棺内に流入した土の圧力によって小口板が外側に倒れ込んだためと考えられる。木棺裏込め土は東西で異なり、西側が黄褐色土（第12層）、東側が褐色土（第13層）となっている。いずれもクサリ礫（ナメラ礫）を含まないこと、黒褐色土ブロックを含んでいることから棺内埋土と異なるものであった。

墓壙 SK07（図版第7b 右上） 墓壙SK07はSK06から約1.8m東で検出された。SK06と同様



第2図 佐田谷墳墓群調査区配置図 (1/400)



第3図 第1調査区斜断面土層図 (1/100)

に第6層上面から掘り込まれていたが、墳丘長軸に対して直交して造られている。墓壇は確認幅0.8m、深さ0.3mで、埋土は褐色土（第16層）である。木棺痕跡を確認することはできなかった。

墓壇 SK08（図版第7 b 右中） 墓壇 SK08はSK07の0.3m直下で検出された。第8層上面から掘り込まれており、確認幅1.1m、深さ0.35mである。埋土は暗褐色土（第17層）で、木棺痕跡は確認できなかった。

墓壇 SK09（図版第7 b 左下） 墓壇 SK09はSK08の西に隣接し、第9層上面から掘り込まれていた。確認幅0.9m、深さ0.3mで、埋土は褐色土（第18層）である。木棺痕跡は確認できなかった。

墓壇 SK10（図版第7 a 左下） 墓壇 SK10は第1調査区の西端部で検出された。検出位置は第9層と地山の境界付近であるが、削平面の傾斜が緩やかとなっていることから、実際には第9層もしくはさらに上層から掘り込まれた可能性がある。確認長径0.9mの楕円形を呈する。

（2）第2調査区（図版第8）

第2調査区は3号墓の北西部分に南北4m、東西2mの範囲とした。昭和61年度に確認調査が行われた範囲と重複させ、確認調査において検出された落ち込みの断面を再度検出し、その性格を確認することを目的として設定した。

調査の結果、昭和61年度に確認された落ち込みを再度検出した。この落ち込みは人為的な掘削による掘形であり、内部の土層堆積がSK06に似ることから、これを墓壇と推測し、SK05とした。

墓壇 SK05（図版第8 b） 墓壇 SK05は第2調査区南西端で検出された。断面を部分的に検出したのみであり、全体の規模は不明であるが、掘り込み面のレベルがSK06・07とほぼ同じであることを確認した。

（3）第3調査区（第4図、カラー図版第2 b、図版第9 a）

佐田谷2号墓は、佐田谷1号墓の東側に隣接している。南東隅部付近が高圧送電線鉄塔によって削平されているが、それ以外の部分については比較的良好に残存している。墳丘は尾根の主軸に平行し、南北13m、東西17m、高さは東側で約1m、西側で約0.5mとなる。昭和61年度の確認調査によって墳丘の北側と西側で周溝が確認された。

先述したように、佐田谷2号墓は周溝が確認されたものの、墳頂平坦面の調査は実施されておらず、埋葬施設の状況も不明であった。よって、墳頂平坦面に長さ6m、幅4mの第3調査区を設定し、埋葬施設の平面的な検出を試みた。

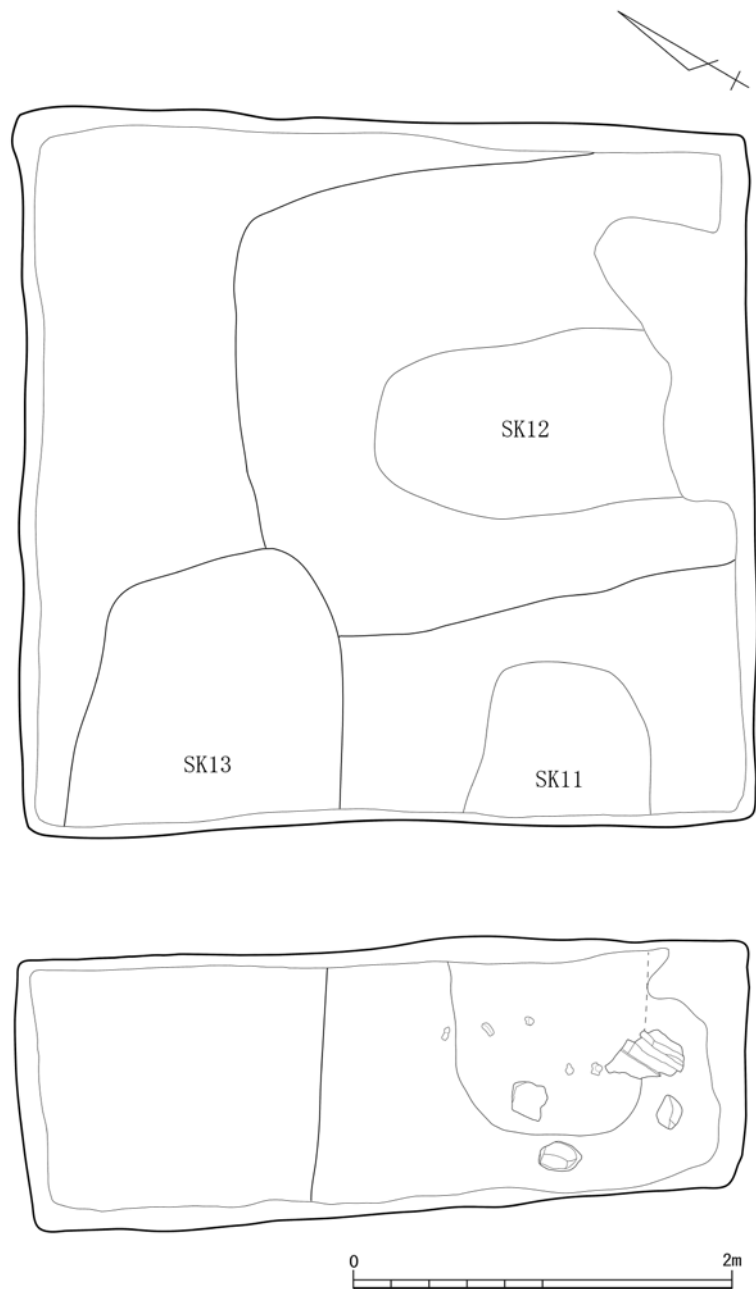
表土下のクサリ礫（ナメラ礫）を含む厚さ10～25cmの黄褐色土直下を精査した結果、SK11・12・13の計3基の埋葬施設を検出した。3基の埋葬施設はその切り合い関係からSK11→SK12→SK13の順に掘削・埋葬されたことがわかった。いずれも全体を検出していないため、規模の詳細は不明である。

墓壇 SK11（図版第9a）

第3調査区南部で不整楕円形の土の広がりを検出したが、クサリ礫（ナメラ礫）を含み、第1調査区の第14層の土と似ることから、この土の広がりを木棺の腐朽

による落ち込み土であると想定した⁽⁸⁾。墓壇はこの落ち込み土を中心に掘削されていたはずであり、墓壇の掘形の北端と東端はSK12とSK13によって削られたと考えられる。南端と西端が調査区外にあるため、規模および平面形は不明である。SK11は落ち込み土の広がり方から、墳丘の主軸と平行する形で掘り込まれていたと考えられる。なお、落ち込み土西端部の直上から標石とみられる礫が検出され、その付近で土器片が出土した。

墓壇 SK12 墓壇SK12は第3調査区東部で検出された。墓壇の一部が調査区外に出ているため、全体の規模は不明であるが、確認幅2.3mである。SK12は北西隅をSK13に切られているが、平面形は隅丸長方形に近いと推定される。SK11と同様に木棺蓋の腐朽にともなう落ち込み土



第4図 第3調査区平面図（1/40）

を検出した。墓壇の主軸はSK11に直交する。土器や標石などは確認されなかった。

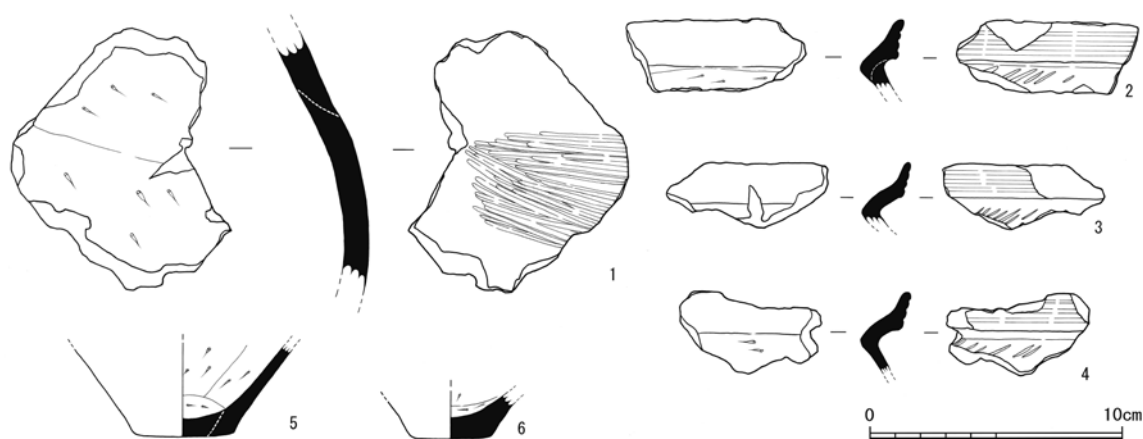
墓壇 SK13 墓壇 SK13は第3調査区北西部で検出された。切り合い関係から3基の中で最も新しいものと考えられる。墓壇の一部が調査区外に出ているために全体の規模は不明であるが、平面形は細長い不整楕円形を呈すると考えられる。SK11・12のような落ち込み土は確認されていないが、埋土はクサリ礫（ナメラ礫）を含まず黒褐色を呈する点で墳丘盛土と容易に識別できる。墓壇の主軸はSK11とほぼ平行しており、墳丘主軸にも平行する。土器や標石などは確認されなかった。（辻村）

（4）第1調査区（佐田谷3号墓）出土土器（第5図1、図版第9b）

佐田谷3号墓出土の遺物は出土位置不明の弥生土器1点のみである。1は胴部片である。小片ながら、その屈曲や厚みから大型品と考えられる。内面に斜め方向のヘラケズリ、外面に横方向のヘラミガキが施される。内外面ともにぶい黄橙色を呈する。焼成は非常に良好で、胎土は径1.0～2.0mmの石英・長石を多量に含む。時期は内面ヘラケズリがみられることから弥生時代中期後葉以降と考えられる。

（5）第3調査区（佐田谷2号墓）出土土器（第5図2～6、図版第9b）

遺物はすべて墓壇SK11上から出土した。2～4は甕の口縁部片である。2は口縁端部が上方に拡張され、頸部付近は粘土の貼り合わせによって若干厚くなる。端面には3条の凹線文、頸部直下には刻目文が施される。内面の頸部直下に横方向のヘラケズリを施した後、口縁部内外を横ナデしている。内外面とも明黄褐色もしくは橙色を呈する。焼成は良好で、胎土は径0.5～1.0mmの石英・長石・黒色鉱物を多量に含むが、緻密である。3は口縁端部が上方に拡張され、端面に3条の凹線文、頸部直下に刻目文が施される。内外面に横ナデを施している。内外面とも明黄褐色もしくは橙色を呈する。焼成は良好で、胎土は径0.5～1.0mmの石英・長石・黒色鉱物を多量に含む。4は口縁端部が上方に拡張され、端面に3条の凹線文、頸部直下に刻目文が施される。内面の頸部直下に横方向のヘラケズリを施した後、口縁部内外を横ナデしている。内外面とも明黄褐色を呈する。焼成は良好で、胎土は径0.5mm程度の石英・長石・黒色鉱物を含むが、緻密である。



第5図 第1・3調査区出土土器（1/3）

5・6は底部である。5は底径4.0cmであり、平底であるが粘土充填によって底面の中心が若干ふくらむ。外面に横ナデ、底面にナデが施され、内面はヘラでケズリ上げた後、横方向のヘラケズリを施している。内外面とも明黄褐色を呈する。焼成は良好で、胎土は径0.5～1.0mmの石英・黒色鉱物を含むが、緻密である。6は底径3.2cmであり、平底である。外面は不明瞭であるが、内面にヘラケズリ、底面にナデが施される。内外面とも明黄褐色を呈するが、一部赤色がかかる。焼成は良好で、胎土は径1.0mm程度の石英・長石を若干含むが、緻密である。

これらの土器は、甕内面の頸部直下に横方向のヘラケズリがみられること、口縁端部の立ち上がりから弥生時代後期前葉の新しい段階に位置づけられる。(村田 晋)

4. 佐田峠1・2号墓の発掘調査(第6図)

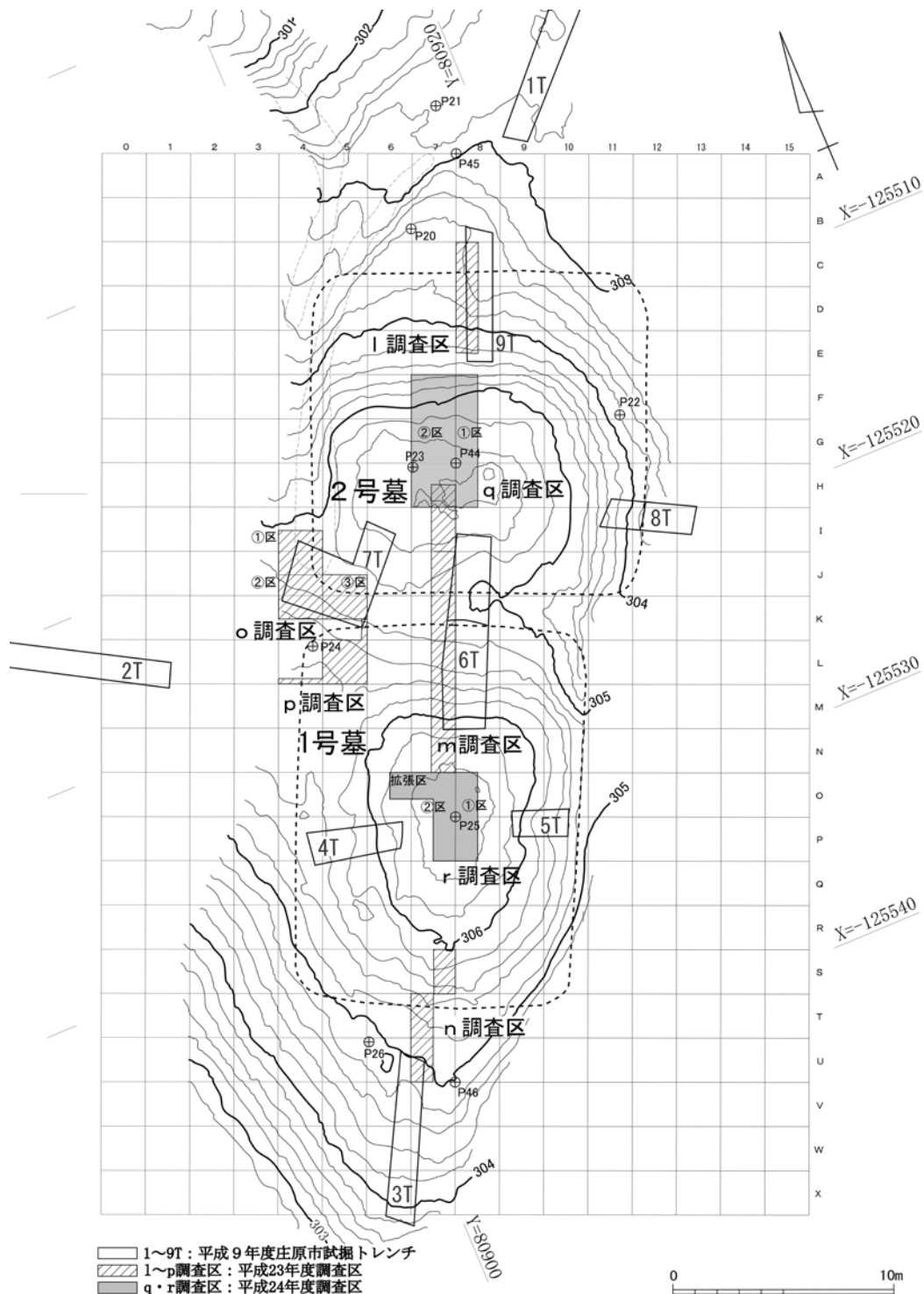
(1) q調査区(第7図、図版第10・11)

q調査区は佐田峠2号墓墳頂の埋葬施設の有無と墓壇配置、墳丘主軸を確認するために設定した。当初q調査区はP.44を基準として、8-Fグリッド・8-Gグリッド・8-Hグリッド西半と7-Hグリッド東半の鍵形の調査区を設定していた。表土(第11図1、第1層)を除去すると8-Fグリッド西半以外の調査区では黄色土(第11図1、第6・21・23層)、8-Fグリッド西半では淡黄色土を検出し、昨年度のm調査区北端で確認されていた角礫を再検出した。その付近の礫の有無を確認すること、8-Fグリッド西半で見られた黄色土と淡黄色土の境界を西側でも再検出することを目的に、7-Fグリッド・7-Gグリッドと7-Hグリッド西半まで調査区を拡張し、q調査区は南北6m、東西3mの長方形となった。その結果、調査区南西部で標石と考えられる2点の礫が検出され、完形に近い台付長頸壺が出土した。この礫と台付長頸壺の付近を精査したところ、墓壇埋土の広がりを検出し、これをST06とした。調査区東部では隅丸長方形を呈する掘形と2点の礫を検出し、ST07とした。

墓壇 ST06(図版第11a) 墓壇ST06は調査区の南西部で検出された。平面形は不整隅丸方形を呈し、規模は長さ2.20m、幅1.07mである。ST06は墳頂平坦面の長軸に直交するように配置されていた。ST06北部では木棺蓋の腐朽による落ち込み土と考えられる土の広がりが検出された。また、中央部の直上からは標石と考えられる4点の礫が検出され、さらに完形に近い台付長頸壺が出土した(カラー図版第3a)ほか、付近から2点の土器片が出土した。

墓壇 ST07(図版第11b) ST07はST06の北東、調査区の東側で検出された。墓壇ST07は平面形が隅丸長方形を呈し、現状で規模は長さ2.07m、幅0.73mである。墓壇の東側の掘形は調査区内では検出されなかったが、南東隅に置かれていたであろう礫の一部が検出されている。そのため、本来の幅は現状より少し大きくなると考えられ、ST06とほぼ同じ大きさであると推定できる。また、ST06と平行し、墳丘長軸に直交するように配置されていた。ST07上でも標石と考えられる礫が北西隅と南東隅に1点ずつ確認された。ST07上からは遺物は出土しなかった。

盛土(第11図1) 7-Fグリッド・8-Fグリッド西半を精査した所、複数の土色境界



第6図 A地区調査区配置図 (1/300)

線を平面的に検出した。その境界を断面において確認するため、8-Fグリッド西半の畦沿いに長さ6m、幅0.25mの断ち割りを行った。その結果、複数観察されていた境界線は流土の境界であることが判明し、加えて地山と盛土の堆積状況も確認できた。地山の上に盛土(第6・24~30層)を検出し、断ち割り北側では墳丘より流れ落ちたと考えられる流土(第20~

23層)を検出した。

墳丘構築の過程としては、次のように考えられる。まず、削り出した地山に盛土を施し墳丘の大部分を成形する(第26~30層)。次に、墳丘の成形が完了すると、上から墓壙を掘り込み、埋葬を行う。これを数回行った後、墳丘を覆うように盛土(第6・24・25層)を施し、墳丘構築を終えている。

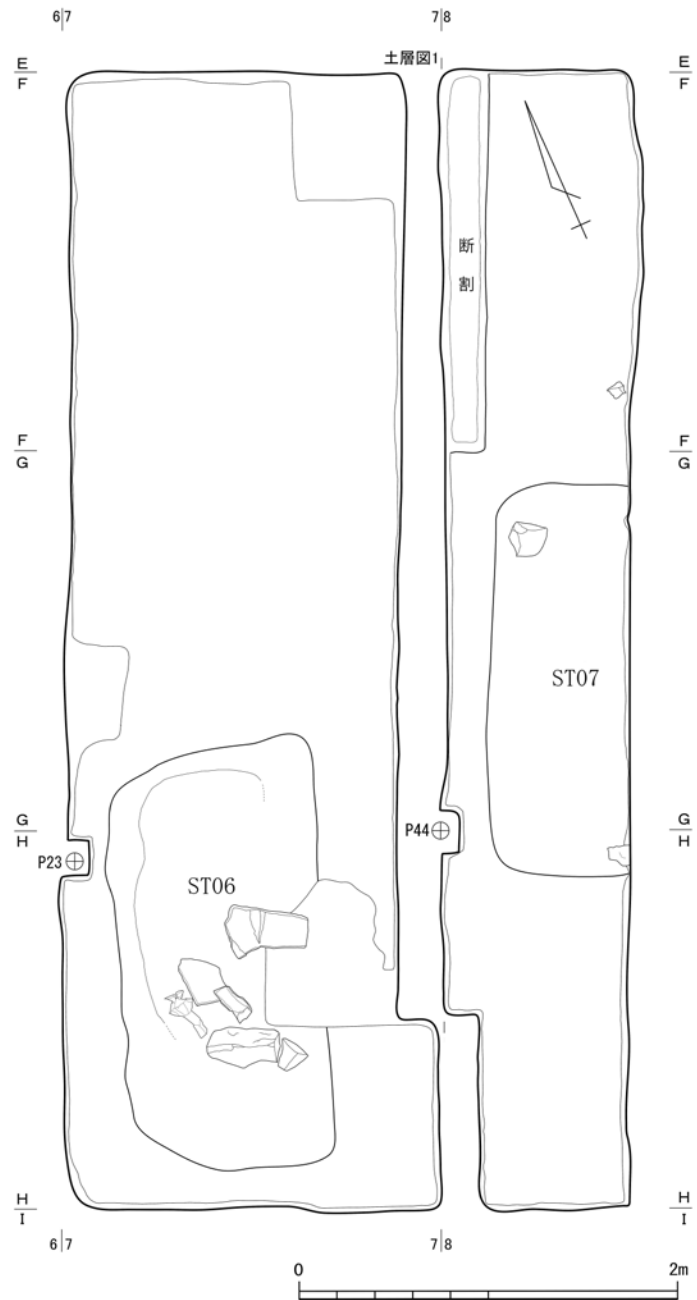
また、2号墓の墳丘北半は、崩れてしまっていることも想定されていたが、ST07の北西隅の礫が原位置を留めていると考えられることから、墳頂平坦面付近は比較的原状を留めていることがわかった。(藤井雅大)

(2) r 調査区

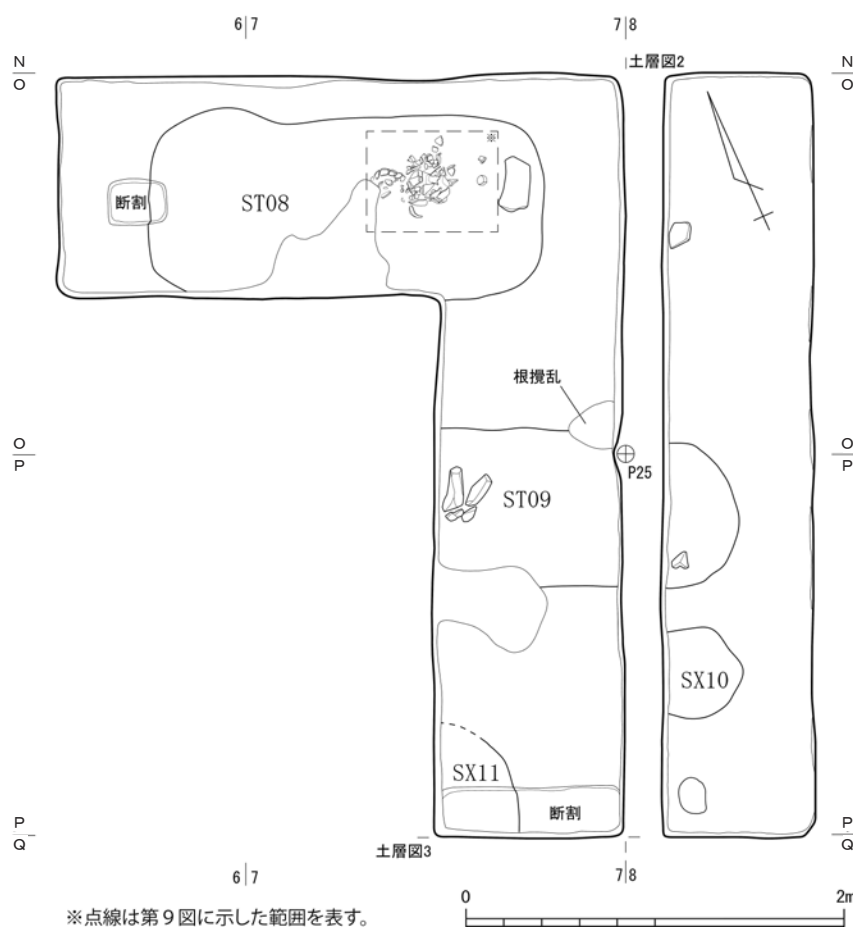
(第8図、図版第12・13)

r 調査区は1号墓墳頂平坦面の埋葬施設の確認を目的に設定した。調査区は7と8、OとPの間のグリッド・ラインの交差点に位置するP.25を中心として、南北4m、東西2mの範囲に設定し、調査途中段階で調査区北西部分をNとOの間のグリッド・ラインに沿って西へ2m、南北1.2mの範囲を拡張した。

掘削を進め、墳丘盛土(第11図2・3、第7・32層)を除去した段階で、遺構の可能性のある土の広がりをも4ヵ所検出した。まず、調査区の北西部分において直上に角礫をともなう黒褐色混じりの黄褐色土の広がりを確認した。当初の調査区のさらに西側におけるこの黄褐色土の広がりを確認する必要性が生じたため、先述のように調査区北西部分を拡張し、土の広がり方が不明瞭だった西端部分に南北0.2m、東西0.3mの断ち割りを入れて墓壙掘形を確認した。なお、拡張部分を掘削する過程で黄褐色土の直上から土器片が集中して出土した。こ



第7図 q 調査区平面図 (1/40)



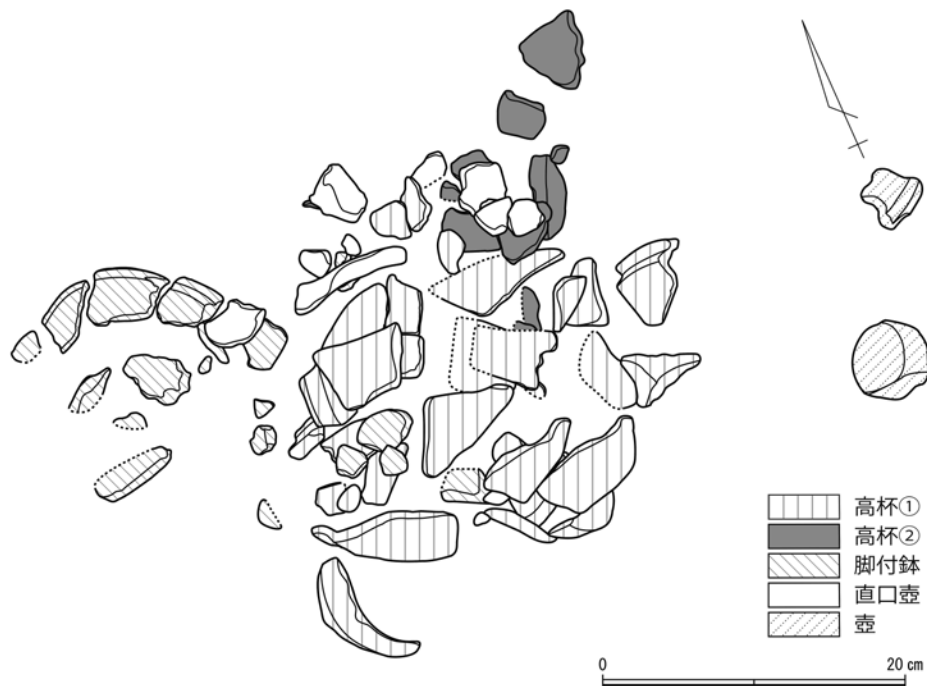
第8図 r 調査区平面図 (1/40)

れに加えて、先に検出した角礫も標石と考えられたため、この黄褐色土の広がりを見積もる墓墳埋土と判断し、ST08とした。

調査区中央付近では東西方向に広がる黒色土を確認した。この黒色土の掘形が長楕円形を呈し、その直上からはST08同様に角礫が検出されたため、これを墓墳と判断して、ST09とした。また、ST09の南に隣接して黒色土の粒を含む黄褐色土が不整形に広がる状況が確認されたため、これをSX10とした。

調査区南西隅部分では明黄褐色土の広がりが不明瞭ながら確認されたが、平面では輪郭が捉えきれなかったため、調査区南壁に沿って幅0.25mの断ち割りを入れ、断面観察を行った。その結果、この明黄褐色土の広がりにともなう掘形を確認し、これをSX11とした。

墓墳 ST08（図版第13a） 墓墳 ST08は調査区北西部で検出された。上面検出に努めたが、墓墳掘形の西端が明瞭に確認できなかったため、想定した西端部分を小さく断ち割って掘形を確認した。平面形は不整形長方形を呈し、東西に主軸をもつ。墓墳規模は長さ2.07m、幅0.95mである。墓墳は墳丘盛土である第33層から掘り込まれていた。墓墳埋土は掘り込まれる盛土と比べてしまりの強い、黒褐色混じりの黄褐色土である。墓墳東端部の直上からは標石と考えられる角礫が検出されており、その西側では土器片が集中して出土した（第9図、



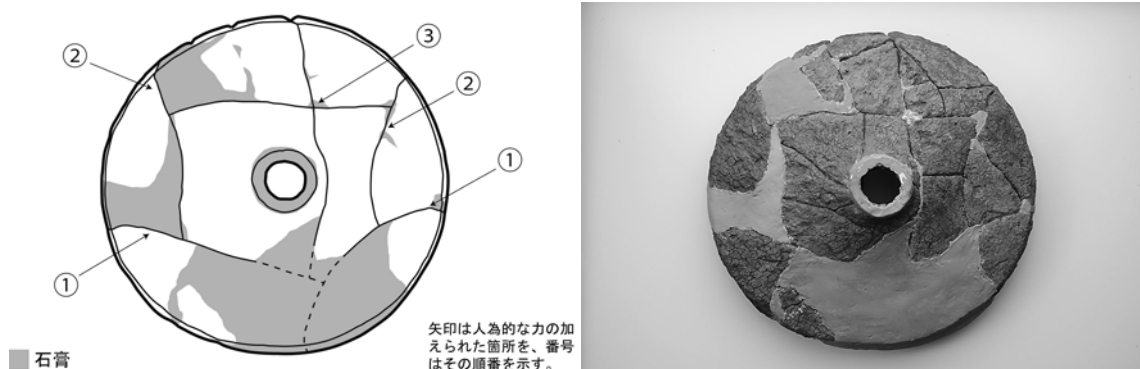
第9図 ST08土器出土状況平面図 (1/5)

カラー図版第3b)⁽⁹⁾。そのうち、復元した高杯の割れ方には複数の先後関係がみられたが、これは人為的な破碎によるものと考えられる(第10図)。以上のことから、これらの土器片はST08被葬者埋葬後の葬送祭祀において人為的に破壊された後、一カ所に集められたと考えられる。

墓壇 ST09 (図版第13b 中央) 墓壇ST09はST08の南約0.7m、調査区中央のP.25付近で検出された。平面形は長楕円形で、東西に主軸をもつ。墓壇規模は長さ1.6m以上、幅0.78mであり、掘形の西端は確認していないが全長1.8m程度と推定できる。墓壇の掘形は畦の断面においても一部確認でき、墓壇は墳丘盛土である第33層から掘り込まれていた(第11図2)。墓壇埋土である第34層はやや粘性の高いもので、第33層と比べて固くしまる黒色土混じりの暗褐色土であり、径3mm程度の細かいクサリ礫(ナメラ礫)を含む。墓壇西部と南東部の直上からは標石と考えられる角礫が検出された。西側の角礫は割れていたが、元々は25～30cm大のひとつの石であったと考えられる。なお、ST09上から遺物は出土しなかった。ST08・09は墳頂平坦面の長軸に直交し、墓壇同士が平行して配置されていた。

性格不明遺構 SX10 (図版第13b 左上) 性格不明遺構SX10はST09の南約0.2m、調査区南東部で検出された。SX10埋土は掘り込まれる盛土層に比べてしまりが弱く、黒色土の粒を含む黄褐色土である。平面形は不整円形を呈し、規模は径0.5m程度で、西端は畦の中で収束する。SX10は上面検出のみであるが、第33層から掘り込まれたと考えられる。周りの墓壇と同じ面から掘り込まれること、平面形、規模から小児埋葬の可能性が考えられる。なお、SX10上から遺物は出土しなかった。

性格不明遺構 SX11 性格不明遺構SX11はST09の南約0.7m、調査区南西隅部で検出された。



第10図 高杯にみられる人為的破碎の状況

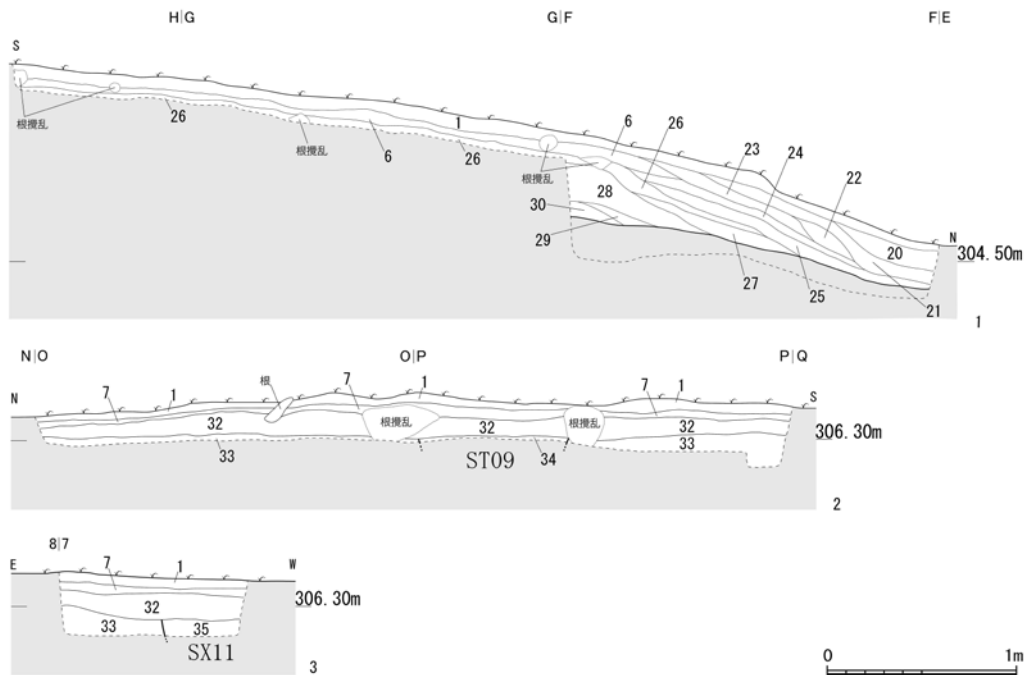
平面規模は確認した部分で0.4～0.6m程度である。SX11埋土（第11図3、第35層）は粘性が高く、径0.5～2.0mm程度のクサリ礫（ナメラ礫）を若干含む明黄褐色土であり、掘り込まれる第33層に比べて軟質である。ST08やST09との位置関係から、西側にのびる形でST08・09と平行して配置された墓壇の可能性が考えられる。なお、SX11上から遺物は出土しなかった。

盛土（第11図2・3）7と8の間のグリッド・ラインに沿って南北方向の畦を設定し、遺構検出面までの土層堆積状況を確認したところ、墓壇が掘り込まれる第33層の上に2層が認められた（第11図2・3、第7・32層）。墓壇の掘り込まれる第33層直上には、第32層が堆積している。第32層はしまりが強く、径5mm程度のクサリ礫（ナメラ礫）を若干含む黄褐色土層であり、南北端付近では5cm程度だが、中央付近では15cm程度とやや厚めに堆積していた。さらに、この第32層の上には、第7層が堆積している。第7層は表土直下にあるため根が混じり、粘性が低くしまりも弱い黒褐色土層である。先述した遺構4基がすべて第33層上面から掘り込まれたと考えられることから、佐田峠1号墓は同じ面においてすべての埋葬が完了した後に、墳頂平坦面全体を盛土で整えて墳丘構築を終えていると考えられる。（村田）

（3）q調査区（佐田峠2号墓）出土遺物（第12図1～3、図版第14a・16a）

1はST06上で出土した台付長頸壺である。一部口縁が欠損し、底部粘土円板も剥落するがほぼ完形に近い形で遺存している。短い脚台に乗った算盤玉形を呈した胴部に長い頸部がつき、緩やかに外湾する口縁部となる。器高は30.7cm、復元口径は6.8cm、胴部最大径は16.4cm、脚径は8.0cmである。胴部外面には横方向あるいは斜め方向の丁寧なヘラミガキが施される。脚部内面と胴部内面下半には横方向のヘラケズリ、胴部内面上半には貼り合わせた際の指頭圧痕、内面には絞り目がみられる。口縁端部には、浅い6条の凹線文がみられる。脚部外面に竹管文、脚端面に1条の凹線が施される。製作順序としては、以下のとおりである。まず、脚部と胴部下半を製作して、底部に粘土円板を充填する。次に、口縁部・頸部・胴部上半となる粘土を貼り合わせ、頸部を絞り出す。最後に、頸部内面にヘラケズリを施し、外面調整を行って施文する。内面が明黄褐色、外面が橙色を呈し、焼成は良好である。胎土は径0.3mm以下の石英を稀に含むが、きわめて緻密なものである。

2はST06付近で出土した甕の口縁部片である。端部上端は欠損しているが、端面には凹



第11図 q・r調査区壁面土層図 (1/40)

線文、頸部直下には刺突文が施される。頸部内面直下に横方向のヘラケズリを施した後、口縁部内外を横ナデする。内外ともにぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。胎土は径0.5～1.0mmの石英・長石、および径0.3mm以下の黒色鉱物を多量に含む。

3はST06付近で出土した底部片である。復元底径は7.0cmである。粘土充填によって作られており、外面に横ナデ、内面にヘラケズリの後にナデを施す。内面がにぶい黄橙色、外面が橙色を呈し、焼成は良好である。胎土は径2.0mm以下の石英を含むが、1の台付長頸壺と酷似した、緻密なものである。

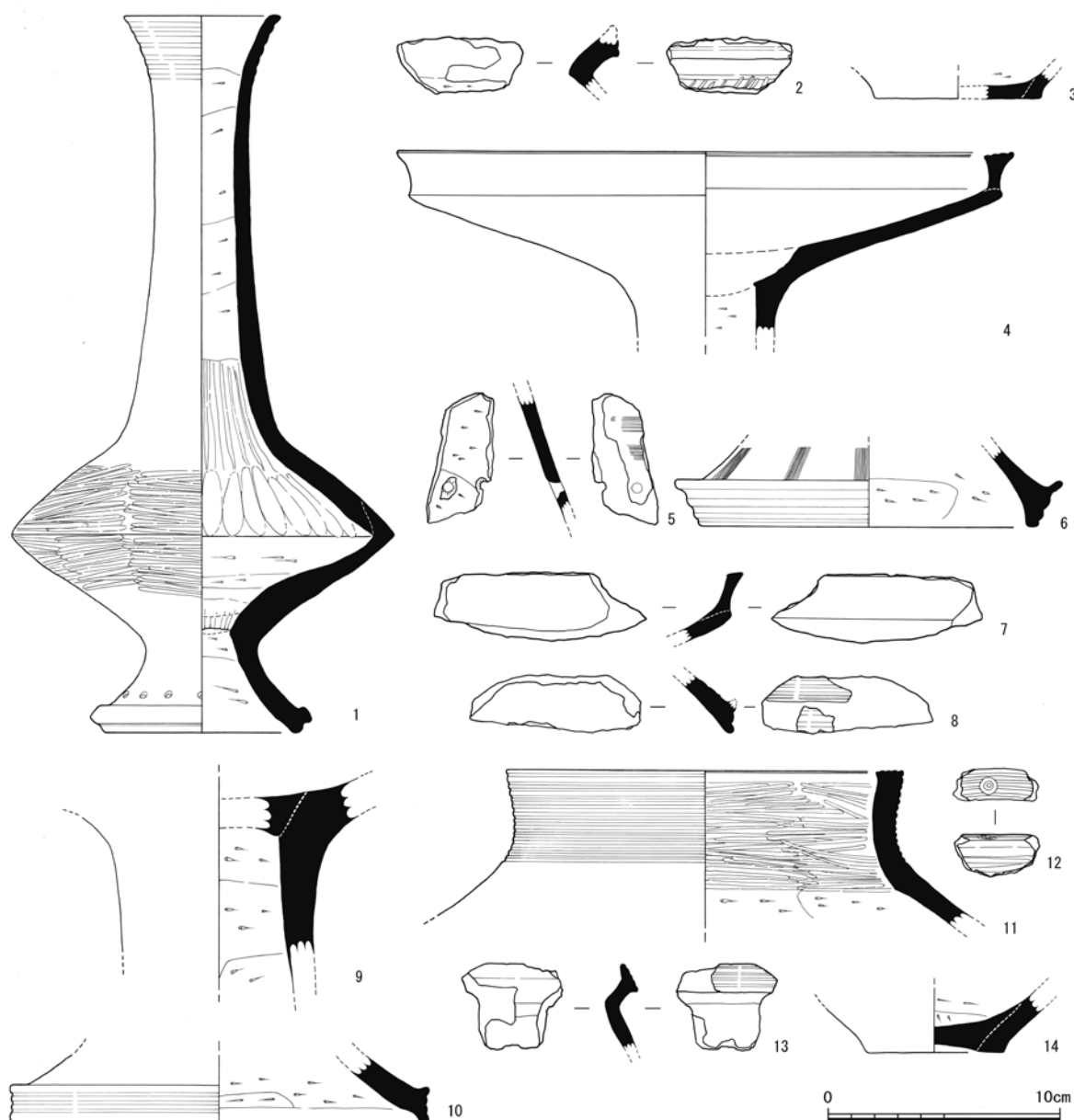
これらの土器は、2の甕の特徴から弥生時代後期前葉に位置づけられる。

なお、1の台付長頸壺の類例が岡山県窪木遺跡において中期後葉から後期前葉の時期幅をもつ河道跡から出土している（平井 1997、第13図）⁽¹⁰⁾。（藤井）

（4）r調査区（佐田峠1号墓）出土遺物（第12図4～14、図版第14b・15・16）

r調査区ではST08上から弥生土器片が集中して出土した。土器片は接合するものも多く、胎土の特徴などから考えて5個体となった。そのうち図化可能であったもの11点を掲載した。

4～6は同一個体の高杯であり、これを高杯①とする（図版第14b・15a・16a）。4は口縁部から脚柱部の一部にかけて残存し、口径26.4cmである。連続成形手法によって作られており、内面には粘土円板の剥落痕が明瞭に残る。口縁端部は内外に拡張され、端面にはごく浅い3条の凹線文が施される。調整は口縁部内外に横ナデ、脚柱部外面に横ナデ、脚柱部内面に横方向のヘラケズリが施される。杯部の内外面は磨滅が著しいがミガキを施すと考えられ、赤色顔料が塗布される。内外面ともにぶい黄褐色ないしは褐色を呈する。焼成は良好で、胎土は径0.5mm程度の黒色光沢鉱物を含む。5は脚柱部の細片である。外面には櫛歯状



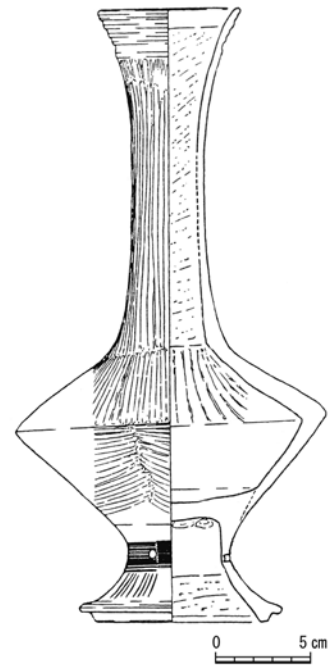
第12図 q・r調査区出土土器（1/3）

工具による直線文が施され、横並びの円孔が2ヵ所外面から穿たれる。内面には横方向ないしは斜め方向のヘラケズリがみられる。また、外面には赤色顔料が塗布される。6は脚部で、復元脚径14.5cmである。端部は肥厚しながら下方へ弱く張り出すとともに上端が拡張される。端面には3条の凹線文が施される。外面には櫛歯状工具による縦方向の直線文が等間隔で施され、赤色顔料が塗布される。内面に横方向のヘラケズリを施した後、下端部を横ナデする。

7・8は同一個体の高杯であり、これを高杯②とする（図版第16a）。7は口縁部細片である。内外面は風化が著しいが、横ナデで調整したと考えられる。内外面とも明黄褐色を呈し、焼成は良好である。胎土は径1.0mm程度の石英・長石を多量に含む。8は脚部細片である。端部は先端へ向かって若干肥厚し、端面には2条の凹線文、外面には5条の浅い凹線文が施

される。調整は風化により観察困難であるが、外面にミガキを施すと考えられる。また、底部に充填した粘土円板が出土しているため（図版第16a 右中）、高杯②は連続成形手法によって作られていると考えられる。

9・10は同一個体の脚付鉢である（図版第15b・16a）。9は鉢部から脚柱部にかけて残存し、復元脚柱径は8.0cm前後である。底部には粘土円板の剥落痕が観察される。脚柱部内面に横方向のヘラケズリが施され、鉢部内面、脚柱部外面にはミガキ後に不定方向のナデが施される。また、脚柱部内面全体に黒色有機物が付着している。明黄褐色ないしはにぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。胎土は径0.5～1.0mmの石英・長石を多量に含む。10は脚部で、脚径18.0cmである。端部は横ナデによって上下方向に拡張され、端面には3条の凹線文が施される。内面に横方向のヘラケズリを施した後、端部を横ナデする。外面にはミガキが施される。また、内面全体に黒色有機物が付着している。



第13図 窪木遺跡出土台付長頸壺
(1/4)（平井 1997）

11・12は同一個体の直口壺である（図版第16b）。11は口縁部から肩部にかけて残存し、復元口径17.0cmである。口縁部は若干外湾しながら立ち上がり、端部は横ナデによって内面がわずかに凹む。平坦な端面には、4条の浅い凹線文が一斉に施された後、竹管文が施される。口縁部外面には細い14条の凹線文が施される。肩部外面にナデ、内面に横方向のヘラケズリを施した後、口縁部内面に横方向の細かいヘラミガキを行う。内外面ともにぶい黄褐色を呈し、焼成は非常に良好である。胎土は径1.0mm程度の石英・長石を多量に含む。

13・14は壺あるいは甕で、同一個体である（図版第16b）。13は口縁部細片である。端部は上方に拡張され、端面にごく浅い凹線文が4条施される。内外面にナデが施される。内外面ともにぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。胎土は径1.0mm程度の長石を含むが、緻密なものである。14は底部で、底径5.8cmである。粘土充填によって作られ、底面をヘラナデすることで若干上げ底気味となっている。内面をヘラでケズリ上げた後、横方向のヘラケズリを施し、外面に横ナデを施している。

これらの土器は、佐田谷1号墓出土土器（妹尾編 1987）と近い特徴をもつものであり、時期は弥生時代後期初頭頃に位置づけられる。（村田）

5. 調査の成果

佐田谷・佐田峠墳墓群の造営時期を再度確認しておきたい。まず、佐田谷3号墓の築造開始は周溝最下層から出土した土器により、弥生時代中期後葉の可能性がある。佐田谷1号墓は弥生時代後期初頭から前葉、佐田谷2号墓は後期前葉でも新しい段階に位置することがわかった。また、佐田峠4・5号墓は中期末葉前後、佐田峠3号墓は中期末葉から後期初頭、

佐田峠1・2号墓は後期前葉頃に降るが、佐田峠1号墓が後期初頭、佐田峠2号墓が後期前葉に位置づけられることが判明した。

墳墓の築造順序と墳丘形態 両墳墓群はすでに中期後葉には造墓活動が始まり、中期後葉から後期前葉にかけて佐田谷3号墓・佐田峠4号墓・佐田峠5号墓→佐田峠3号墓→佐田谷1号墓・佐田峠1号墓→佐田峠2号墓→佐田谷2号墓という順序で築造された可能性が高いことが推測できる。また、昭和61年の調査で明らかにされたように、佐田谷墳墓群では方形台状墓（3号墓）から四隅突出型墳丘墓（1号墓）、佐田峠墳墓群では四隅突出型墳丘墓（3・4号墓）から方形台状墓（1・2号墓）へと、その墳丘形態が変化することも推測できた。両墳墓群内において四隅突出型墳丘墓と方形台状墓がともに併存しつつ、連綿と造営されていたという複雑な造墓状況を想像することができる。

佐田谷墳墓群における埋葬施設の構造について これまで埋葬施設の内容が不明であった佐田谷2・3号墓において埋葬施設を検出することができた。佐田谷3号墓では、墳丘南側削平面に設定した第1調査区から5基の墓壇掘形を確認した。これらの墓壇は構築の方法から2つのグループに分けることができる。すなわち墳丘下層から掘り込まれたSK08・09・10と、墳丘上層から掘り込まれたSK06・07の2者である。前者のグループは墓壇の掘削・埋葬と封土をくり返しており、佐田峠3号墓における埋葬施設の構築方法と同様であった。後者のグループは佐田谷1・2号墓および佐田峠1・2号墓と同じく、墳丘上層から墓壇を掘り込んでいた。このことから佐田谷3号墓は埋葬施設の構築方法が墳丘の築造と同時進行で行なわれるものから、墳丘成形後に掘り込むものへと変化したと考えられる。また、埋葬施設の配置についても、SK08・09がいずれも墳丘主軸に直交する形で配置されているのに対して、墳丘主軸に平行するSK06と、直交するSK07にわかれる。平面的な検出を行っていないため断定はできないが、佐田峠3号墓のように墓壇が主軸を同一にして配置されるものから、佐田谷1・2号墓のように主軸を違って配置されるものへと変化した可能性が指摘できる。ただし、3号墓では埋葬施設の時期を明確には特定できず、SK06・07とSK08・09・10の間にはどの程度の時期差があるかは不明といわざるをえない。また、SK08・09・10が、3号墓築造



第14図 q 調査区作業風景



第15図 r 調査区作業風景

以前に造られた墳丘をもたない土壙墓である可能性も否定できない⁽¹¹⁾。この点は類例と比較しながら今後、慎重に判断する必要があるだろう。

佐田谷2号墓では、3基の埋葬施設を検出した。いずれも規模を明らかにすることができなかったが、3基の墓壙が切り合う形で配置された状況を確認した。SK11→SK12→SK13と順次墓壙を掘削し、埋葬を行っている。SK12・13はSK11の墓壙に一部重複する形で配置されている状況から、SK11を意識したものと考えられる。SK11が佐田谷2号墓墳頂平坦面のほぼ中心に位置することからも、中心埋葬であった可能性が指摘できよう。また、検出した部分の規模から判断すると、SK11は長さ4m以上、幅3m以上の規模をもつと推定され、佐田谷1号墓の中心埋葬であるSK2と同等あるいはそれ以上の規模と想定できる。

墳丘構築方法の変化と墓壙の配置 中期後葉段階では、両墳墓群ともに埋葬を行いつつ墳丘を徐々に盛り上げていく同時進行型の構築方法が採用された可能性が高いのに対して、後期前葉段階には、墳丘を成形した後に、数基の墓壙を掘削する墳丘先行型へと変化していたことが判明した。

また一方で、墳丘規模の格差と埋葬配置の差異も明確となった。佐田峠墳墓群では墳丘規模が17mを超えるものではなく、佐田谷墳墓群よりも相対的に小規模な墳墓で構成されていた。佐田峠墳墓群は同時進行型の3号墓、墳丘先行型の1・2号墓の違いはあっても、いずれも複数の墓壙が墳頂平坦面長軸に直交した方向に平行して配置されていた。そして平行に配置された墓壙をもつ墳墓には、中心となる大型墓壙を認めることはできなかった。これに対して佐田谷1・2号墓では、中心となる大型墓壙が出現していたことがわかる。今回検出した佐田谷2号墓の中心墓壙SK11には、佐田谷1号墓の中心墓壙SK2同様、上面検出において木棺蓋の腐朽にともなう落ち込み土が顕著にみられたことから、木蓋をもつ大型木棺が想定できる。埋葬施設の内部の調査は実施していないが、墓壙の規模からSK2と同じ木棺木槨の二重構造をもつ可能性さえあるかもしれない。

さらに佐田谷2号墓では、中心墓壙SK11の全長が4m以上と大型化するだけでなく、中心埋葬の墓壙の一部を破壊して囲繞するように周辺埋葬が順次行われた状況を示していた。調査担当者のひとり、野島は以前に京都府丹後地域の弥生時代後期の方形台状墓に、このような大型の中心埋葬に周辺埋葬が囲繞する墓壙配置形態が出現してくることを指摘した。それを前方後円墳出現前夜の社会変化に起因する葬送儀礼の複雑化・肥大化とみたが（野島・野々口 1999、野島 2002）、庄原地域においても、同様な墓壙配置が出現していたことが判明した。

以上の調査成果からみても、佐田谷・佐田峠墳墓群は中国地方における弥生墳丘墓の発展の様相を知ることができる、きわめて重要な遺跡であるといえる。（野島・辻村）

本報告は『四隅突出型墳丘墓の発達に関する考古学的研究』と題する科学研究費補助金（基盤研究（C）、課題番号23520922〈研究代表者：野島 永〉）による。今回の調査概要報告作成においては、庄原市教育委員会からの情報提供があったことを記しておきたい。また、今

回の調査においても多くの方々にご教示をいただき、ご指導を賜った。ともに感謝したい。

池淵俊一 植田千佳穂 兼藤英明 君嶋俊行 桑原隆博 澤田秀実 實盛良彦 妹尾周三
寺岡隆行 葉杖哲也 濱田延充 藤原好二 松本岩雄 向田裕始 若林邦彦

註

- (1) 周辺遺跡の詳細については、野島・石貫・小林ほか2009文献を参考にさせていただきたい。
- (2) 調査区および検出遺構については、平面図・断面図・立面図を作成したほか、3Dスキャニングによって、5mmメッシュの3次元点群データを記録した。
- (3) 佐田谷1号墓の発掘調査に関しては、東広島市教育委員会妹尾周三氏にご教示をいただいた。また、佐田谷1号墓の発掘調査における記録資料閲覧に関しては、広島県埋蔵文化財調査室向田裕始氏にご協力をいただいた。
- (4) 当初の計画では、今年度は佐田谷3号墓の墳丘構築状況と埋葬施設の確認、および佐田谷2号墓を含めたその周辺調査のみを行う予定であったが、発掘調査最終年度の第6次調査の内容を検討するために設置された佐田峠墳墓群発掘調査検討委員会によって、墳丘構築と埋葬施設の関係の確認が重視され、佐田谷2・3号墓および佐田峠1・2号墓の埋葬施設の確認を行うこととなった。
- (5) 墓壇の断ち割りや掘削による破壊は極力行わず、埋葬施設の破壊を最小限にとどめる方向で調査を進める旨、文化庁から調査指導があった。
- (6) 調査参加者は以下のとおりである。本概要報告については野島と、庄原市教育委員会辻村とともに大学院生による分担執筆を行なった。
広島大学大学院博士課程前期生：今福拓哉・藤井雅大・村田 晋
広島大学学部生：戸川貴大・三輪剛史・山本晃弘・浅井美雪・大嶋健介・金森大輝・北之園直哉・古久保茜
- (7) 佐田谷墳墓群では、遺構番号をつけるにあたり、昭和61年度の調査と整合させるため、埋葬施設（墓壇）の記号として“SK”を使用した。また、昭和61年度に確認されていた3号墓の「落ち込み」については墓壇SK05とし、以降は検出順に墓壇SK06, 07…とした。
- (8) 本来は棺内流入土と裏込め土に分けられるべきだが、検出時点で土質の違いを認識できなかったため、墓壇埋土として一括した。
- (9) 第9図における個体の表現は、後の「(4) r 調査区(佐田峠1号墓)出土遺物」内の表現に対応させた。
- (10) 台付長頸壺の類例に関しては、寝屋川市教育委員会濱田延充氏、四條畷市教育委員会實森良彦氏にご教示をいただいた。
- (11) 佐田谷墳墓群では確認されていないが、佐田峠3号墓および4号墓の調査において墳丘外にも埋葬施設が確認されている。いずれも時期が明らかではないが、佐田谷墳墓群においても墳丘をもたない土壇墓が存在していた可能性はある。また、三次市に所在する花園遺跡のように（中村・向田 1979・1980）、複数期にわたって継続的に墓域が営まれたことも考えられる。

引用・参考文献

- 池淵俊一 2007 「山陰における方形区画墓の埋葬論理と集団関係」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター、117～143頁。
- 石貫弘泰・斉藤 礼 2008 「佐田峠墳墓群（第1次）調査」『広島大学大学院文学研究科 帝釈峡遺跡群発掘調査年報』XXII、広島大学大学院文学研究科帝釈峡遺跡群発掘調査室、34～36頁。

- 稲垣寿彦編 2001 『和田原C地点遺跡発掘調査報告書』広島県庄原市教育委員会。
- 稲垣寿彦・今西隆行編 2004 「和田原E地点遺跡・小和田横穴墓」『庄原市農業支援施設建設工事にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書』広島県庄原市教育委員会。
- 今福拓哉 2012 「弥生墳丘墓の埋葬施設と墳丘構築に関する研究」『広島大学考古学研究室紀要』第4号、広島大学大学院文学研究科帝釈峡調査室・考古学研究室、83～100頁。
- 妹尾周三 1986 「江ノ川中・上流域における墓制からみた弥生時代中・後期の社会－佐田谷1号墓の調査とその意義を中心として－」『芸備』第17集、17～34頁。
- 妹尾周三 1996 「佐田谷墳墓群の調査」『芸備』第25集、10～19頁。
- 妹尾周三編 1987 『佐田谷墳墓群』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第63集、広島県埋蔵文化財調査センター。
- 中村芳昭・向田裕始 1979 『史跡 花園遺跡 一調査と整備一』三次市教育委員会。
- 中村芳昭・向田裕始 1980 『史跡 花園遺跡 一第2次調査と整備一』三次市教育委員会・三次市文化財協会。
- 野島 永 2002 「丹後地域における弥生時代の鉄をめぐって」『青いガラスの燦き』大阪府立弥生文化博物館図録24、大阪府立弥生文化博物館、88～93頁。
- 野島 永 2008 「佐田峠墳墓群2007年度の調査」『広島大学大学院文学研究科 帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』XXII、広島大学大学院文学研究科帝釈峡遺跡群発掘調査室1～3頁。
- 野島 永・野々口陽子 1999 「近畿地方北部における古墳成立期の墳墓(1)」『京都府埋蔵文化財情報』第74号、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター、19～32頁。
- 野島 永・石貫弘泰・小林昂博・辻村哲農・宮岡昌宣 2009 「佐田峠墳墓群(第2次)調査」『広島大学大学院文学研究科 帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』XXIII、広島大学大学院文学研究科帝釈峡遺跡群発掘調査室・考古学研究室、23～52頁。
- 野島 永・矢部俊一 2010 「佐田峠墳墓群(第3次)調査」『広島大学大学院文学研究科 帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』XXIV、広島大学大学院文学研究科帝釈峡遺跡群発掘調査室・考古学研究室、23～39頁。
- 野島 永・脇山佳奈・齋藤友紀・津田真琴・今津和也・谷口早季・横山瑛一 2011 「佐田峠墳墓群(第4次)調査」『広島大学大学院文学研究科 帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』XXV、広島大学大学院文学研究科帝釈峡遺跡群発掘調査室・考古学研究室、23～38頁。
- 平井泰男 1997 「河道6」『窪木遺跡1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告120、岡山県古代吉備文化財センター、211～221頁。
- 平井泰男 2002 「備中南部における弥生時代中期後葉から後期前葉の土器編年」『環瀬戸内海の考古学－平井勝氏追悼論文集－』上巻、古代吉備研究会、389～410頁。
- 藤田広幸 1988 『和田原遺跡』広島県埋蔵文化財センター調査報告書第68集、広島県埋蔵文化財調査センター。
- 松井和幸編 1999 『和田原D地点遺跡発掘調査報告書』広島県埋蔵文化財センター調査報告書第186集、簡易保険福祉事業財団・庄原市教育委員会・広島県埋蔵文化財調査センター。
- 脇山佳奈・今福拓哉・小森由佳利・野島 永 2012 「佐田峠墳墓群(第5次)の調査」『広島大学大学院文学研究科 帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』XXVI、広島大学大学院文学研究科帝釈峡遺跡群発掘調査室・考古学研究室、21～46頁。
- 和田晴吾 2003 「弥生墳丘墓の再検討」『古代日韓交流の考古学的研究－葬制の比較研究－』平成11年度～平成13年度科学研究費補助金(基盤研究(B))(1)研究成果報告書、課題番号11410108)、3～29頁。

付表1 佐田谷・佐田峠墳墓群土層観察表

第1調査区(第3図)

層序	土色名	土色	粘性	しまり	詳細	性格
第1層	-	-	-	-	-	表土
第2層	黄褐色	10YR5/8	弱	やや強	粒子の細かい砂質土。径5mm程度のクサリ礫を若干含む。	3号墓盛土
第3層	黒褐色	10YR3/2	なし	弱	砂質土。	3号墓盛土
第4層	にぶい黄褐色	10YR4/3	なし	弱	砂質土。	3号墓盛土
第5層	明黄褐色	10YR6/8	弱	強	粒子のやや粗い砂質土。	3号墓盛土
第6層	褐色	10YR4/4	なし	弱	砂質土。径1～5mmの明黄褐色土・黒褐色土ブロックを含む。	3号墓盛土
第7層	暗褐色	10YR3/3	なし	弱	砂質土。径1～5mmの褐色土・黒褐色土ブロックを含む。	3号墓盛土
第8層	褐色	10YR5/4	なし	強	砂質土。径2～3mmの黒褐色土ブロックを含む。	SK09封土
第9層	明黄褐色	10YR6/6	なし	強	砂質土。	3号墓盛土
第10層	暗褐色	10YR3/3	なし	弱	砂質土。径5～10mmの褐色土ブロックを含む。	3号墓盛土
第11層	褐色	10YR4/4	なし	弱	砂質土。	SK10埋土
第12層	にぶい黄褐色	10YR5/4	なし	弱	砂質土。径2～3mmの黒褐色土ブロックを含む。	SK06裏込め土
第13層	褐色	10YR4/4	なし	弱	砂質土。径2～3mmの黒褐色土ブロックを含む。	SK06裏込め土
第14層	黄褐色	10YR5/6	なし	やや強	砂質土。径5mm程度のクサリ礫をわずかに含む。	SK06埋土
第15層	黄褐色	10YR5/8	なし	やや強	砂質土。径5mm程度のクサリ礫を多量に含む。	SK06埋土
第16層	褐色	10YR4/6	なし	やや強	砂質土。	SK07埋土
第17層	暗褐色	10YR3/4	なし	強	砂質土。	SK08埋土
第18層	褐色	10YR4/4	なし	やや強	砂質土。	SK09埋土

q調査区(第11図1)

層序	土色名	土色	粘性	しまり	詳細	性格
第1層	-	-	-	-	-	表土
第20層	褐色	10YR4/4	弱	やや強	シルトをベースとし、礫はほとんど含まない。	流土
第21層	暗褐色	10YR3/4	弱	強	シルトをベースとし、礫はほとんど含まない。	流土
第22層	褐色	10YR4/6	弱	強	シルトをベースとし、礫はほとんど含まない。	流土
第23層	黄褐色	10YR5/8	やや強	強	シルトをベースとし、礫はほとんど含まない。	流土
第6層	黄褐色	10YR5/8	強	強	シルトをベースとし、礫はほとんど含まない。2011年度m調査区第6層に対応する。	2号墓盛土
第24層	明褐色	7.5YR5/8	強	強	シルトをベースとし、礫はほとんど含まない。	2号墓盛土
第25層	橙色	7.5YR6/8	強	弱	シルトをベースに、細礫と中礫を2%程含む。	2号墓盛土
第26層	明褐色	7.5YR5/8	強	強	シルトをベースとし、礫はほとんど含まない。上面は2号墓の全遺構の検出面に相当する。	2号墓盛土
第27層	黄褐色	10YR5/6	強	弱	シルトをベースとし、礫はほとんど含まない。	2号墓盛土
第28層	黄褐色	10YR5/6	強	強	シルトをベースとし、礫はほとんど含まない。	2号墓盛土
第29層	にぶい黄褐色	10YR5/4	強	弱	シルトをベースとし、礫はほとんど含まない。	2号墓盛土
第30層	褐色	10YR4/6	強	強	シルトをベースとし、礫はほとんど含まない。	2号墓盛土

r調査区(第11図2・3)

層序	土色名	土色	粘性	しまり	詳細	性格
第1層	-	-	-	-	-	表土
第7層	黒褐色	7.5YR3/2	弱	弱	砂質土をベースとし、表土直下の層であり根が混じる。2011年度m調査区第7層に対応している。	1号墓盛土
第32層	にぶい黄褐色	10YR5/4	弱	弱	シルト質土をベースとし砂はほとんど含まない。一部に根が混じる。	1号墓盛土
第33層	黄褐色	10YR5/6	やや弱	強	シルト質土をベースとし径5mm程度のクサリ礫を若干含む。上面は1号墓の全遺構の検出面に相当する。	1号墓盛土
第34層	暗褐色	10YR3/3	やや強	強	シルト質土をベースとし径3mm程度のクサリ礫を含む。一部黒色土を含む。	ST09埋土
第35層	明黄褐色	10YR6/6	強	やや強	粘土質土で、径2mm以下のクサリ礫を若干含む。	SX11埋土